

# 縄文時代玉製品にみられる大陸文化の影響

川崎 保

長野県埋蔵文化財センター

## はじめに

日本列島の歴史の中で縄文時代は約1万年間という、弥生時代以降に比べると非常に長い時間幅があり、本稿でとりあげる縄文時代の石器（普通、縄文時代の発掘調査報告書では玉（ぎょく）製品は石器や石製品に分類されることが多い）は、非常にバリエーションが多い。一つには対象とする時間幅が長いためである。また、これは石器に限らないが、縄文時代の地域文化が、旧石器時代に比べると非常に多様で、地域的な特色がさまざまである。おそらくこの両方の原因によって、他の時代に比べて非常に多様なように見える。いずれにせよ、この多様な石器の世界の中でみれば、玉製品というものは、非常に断片的な資料である。

## 1. 縄文文化研究における玉製品研究の意義

しかし、そうした資料的な限界も予想される一方で、私は縄文時代の文物のなかで注目すべき資料と考えるか、なぜ玉製品に焦点をあてるのかを、簡単に紹介したい。それは、一つには、多様な縄文時代の石器の中で、玉質の石製品は非常に斉一性が高いこと。もちろん地域的な特質は存在するのであるが、汎日本列島的な分布を示しているが、地域的な特色を配慮したとしても同じような土俵で扱いやすいことがある。

このことは非常に重要であると私は考えている。縄文文化あるいは段階としての縄文時代というものは（たとえば博物館の展示などでは）、非常に有効な枠組みであるとは私も考えている。しかし、西田泰民氏が指摘されるようにあまりの多様さに本当に一つの文化としてとらえていて良いのだろうかという懸念がある（西田2000）。たしかに、列島の縄文文化を同じ素材で論じることが難しいのである。しかし、今回とりあげる玦状耳飾をはじめとする玉質石製品（以下玉製品と略す）は、北海道から九州まで広く分布していて、おおよそ変遷も対応する。あるいは、縄文文化という枠組みがどこまで有効かという一つの試金石になるかもしれない。

さらに、玉製品のうち今回中心にとりあげる装身具（玦状耳飾など）は、日本考古学者によるその命名が示すように、当初から大陸の文化との関係が強く想定され

たものである。

これは、あくまで私のイメージであったかもしれないが、縄文文化という日本列島に孤立した独自の文化という先入観が強かった私にとっては意外であり、本当に大陸文化の影響はあるのか、ないのか。あったとしたらどの程度なのか。また、縄文文化の位置づけにも影響するのかといったことを解明すべく、玉製品に取り組んでいる。

## 2. 玉製品とは

「玉」（ぎょく）とはどのようなものであるか。少し歴史・人文系のテーマから外れるが、共通の土台を確認しておかないと比較研究が難しかったので、なるべく定義的なものははっきりさせておきたい。

すでに述べたように日本の発掘調査報告書の多くでは、石器・石製品に分類されることが多い。また、似たような分類に「たま」というものもある。「玉」という漢字の「ギョク」は音で、「たま」は訓であるといってしまうと、それまでであるが、そうすべきではないと私は考える（川崎 2004）。

玉（ギョク）はそもそも中国の概念である。古代から現代にいたるまでさまざまな定義があるが、要するに「磨くと光る石ないしは石に類するもの」である。一方「たま」というと「球面をもつもの。あるいは丸いもの」のことである。現代日本語でも、ギョクは材質に重きを置いた言葉であり、たまは形状に重きを置いた言葉として使われている。私は材質の問題も重視しているので、ここではおもに材質が「玉」（ギョク）とされる製品を主に扱う。

しかし、実際にはそれぞれ非実用品であるという予断が含まれていることが多いので、その点は注意すべきであるが、本来的にはそうした意味は含めない方が考古学的にはよいと考える。

では、実際にどういう材質（物質）が玉（以下とくに断らない限り、ギョクと読むこととする）と呼ばれてきたのか、また呼ぶべきなのか。

玉に限らず石器石製品の物質としての分析は、実は非常に難しい。その原因はいくつかあるが、一つには貴重な文化財であったり、宝物であったりして、破壊分析がしにくいということがある。現在非破壊でも定性的な成分分析が行えるので、私も含めてこうした理化学的な非破壊の成分分析のデータを参考にしながら、素材を推定することになるが、それでも破壊分析によるものよりは格段成果が劣ることは否めない。

通常私たちが石（いし）と呼んでいるものは、地質学的にいえば、岩石である。岩石とは鉱物の集合体（一つの鉱物からなる岩石もある）である。

具体的にいうと縄文時代の石器として有名な黒曜石は二酸化珪素（ $\text{SiO}_2$ ）の集合体である。二酸化珪素が鉱物として存在する場合は、石英と呼ばれるが、黒曜石のようにガラス（アモルファス）で存在する場合は、成分は同じでも石英とは呼ばない。また岩石学では、鉱物は〇〇石（セキ）と呼び、岩石は××岩（ガン）と呼ぶようになっている。黒曜石（obsidian）は、岩石学的には黒曜岩が正しいが、黒曜石があまりにも有名なので、歴史系の博物館などでは黒曜石という呼称で通している。

中国で一般に玉とされているものは、ネフライト（nephrite）である。日本の岩石学的呼称は透閃石・透緑閃石岩である。ただ、実際に販売されていたり、考古資料として玉と呼ばれていたりするものは、透閃石・透緑閃石岩の中の緻密で他の鉱物があまり含まれていないものをとくに玉とする<sup>(1)</sup>。

極めて大雑把にいうと中国で玉とただ記述してある場合はネフライトであるばかりが多い。しかし、実際にはネフライト以外の「磨けば光る」材質のものも玉として扱われることがある。狭義の玉はネフライトであり、それ以外のおもに軟質で、岩石・鉱物ではないものは広義の玉としておく（川崎 2007）<sup>(2)</sup>。しかし、日本では以下のような研究史から玉を二つ（硬玉と軟玉）に分けている。1917年、京都大学が国府（こう）遺跡（現大阪府藤井寺市）の発掘調査を行った時に、玉質の石製耳飾が出土した。石材を調査したところ、ネフライトが含まれていることが分かったが、同時にこのころ日本にはヒスイ（ヒスイ輝石岩）製品が縄文時代の遺跡から出土することが知られていた。ヒスイ（翡翠）は古代中国の遺跡では出土しないが、19世紀にはビルマ産のヒスイがもたらされて、ネフライトに比べても遜色ないほど硬く（硬度はネフライトもヒスイ輝石岩も6から7程度、石英・水晶と同じくらい）、緻密である。玉としての価値は、磨くと光沢を有するという点がもっとも重要な性質であろうが、それとともに硬くてより緻密であることが美術的価値を持つようである（藤田 1989、川崎 2002・2007）。

従来玉としてネフライトと遜色がなく、すでに中国でもヒスイ輝石岩は玉とされることもあって、ヒスイ輝石岩と区別する意味を含めて、ヒスイ輝石岩よりは軟らかいネフライトを軟玉、ヒスイ輝石岩は硬玉と呼ぶようになったものと思われる。

現在、硬玉、軟玉という呼称をやめようという研究者もいるが、ヒスイ＝硬玉という概念はかなり定着している。一方軟玉の方は、軟らかい玉と呼んで、ヒスイ以外の、前述したようなたとえば蛇紋石・岩（硬度2程度）などを軟玉の仲間などとするが、蛇紋岩を広義の玉に入れるかどうかは別にして、これを軟玉とするのは好ましくない。

私は、玉という概念が地質学・岩石学用語ではなく、光沢をもつ、美しい緻密で硬いといった文化的な概念に基づいている用語であることを踏まえて用いればよい

と考える。その中で、ヒスイ輝石岩（ジェーダイト）を硬玉、透閃石・透緑閃石岩（ネフライト）を軟玉と定義して呼べばよいと考える<sup>(3)</sup>。

### 3. 玉製品の出現まで

日本列島では軟玉と呼べるほどの緻密性や美しいものではないが、透（緑）閃石岩製の石器・斧形石器は旧石器時代からある（長野県信濃町日向林 B 遺跡：谷 2000）（図 1）。AT（始良丹沢火山灰）降下以前という層から出土しているので、約 30,000



図 1 斧形石器など（日向林 B 遺跡）

年前あたりまでさかのぼることになる。しかし、斧形石器（部分磨製石斧）自体がその後普遍的に存在するわけではない。縄文時代早期（約 9,000 年前）に小型の部分磨製石斧が出現するが、これとの直接的な関係はよくわかっていない。しかし、この小型の部分磨製石斧にも透（緑）閃石岩が使われている（長野県大町市山の神遺跡：川崎 2003）。こうした石斧類に透（緑）閃石岩は縄文時代前期以降も使われる（川崎 2004）ので、そうした利器に使われることは、直接的系譜がつながるかどうかは別にして透（緑）閃石岩が磨製石斧のような利器に向いていることを示している。

ただ、旧石器時代や縄文時代早期の磨製石斧はおもに転石を利用して、透（緑）閃石以外の蛇紋岩や他の角閃石類も多く見られる。冒頭で述べたように本来玉製品とは玉でできた器物という意味であるが、こうした磨製石斧類に玉に入れてもおかしくないような石材も含まれているが、磨製石斧の石材は必ずしも緻密で美しくはなく、玉概念に関係するような選択が働いているとは思えない。今のところ透（緑）閃石製磨製石斧を玉製品であるとまでは言えないと考えている。

また、旧石器時代末に北海道の湯の里遺跡やピリカ遺跡で細石器に伴う土坑（墓と推測されている）からカンラン石製の小玉が出土している。カンラン石はペリドットと呼ばれ、大きいものは宝石として扱われ、硬度も 7 に近いので、玉といってもよいだろう。中央に穴があいていることから、装身具の可能性も高い（図 2）（土肥 1997）。しかし、このカンラン石製小玉は、北海道以南では知られていない。縄文時代にも類例を聞かない。縄文時代草創期や早期に遡る可能性がある玉製品が、いくつか知られている（鳥取県上福万遺跡：縄文時代早期押型文土器期）が、いず

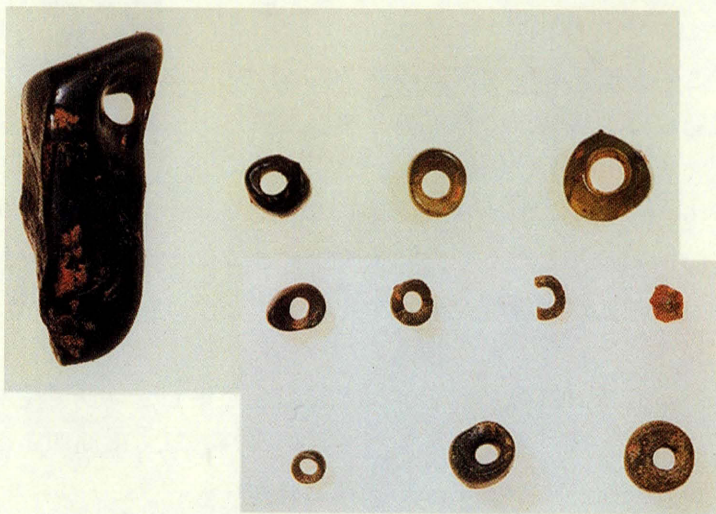


図 2 カンラン石製小玉（上：北海道湯の里遺跡，下：ピリカ遺跡）

れも単発的なもので他に類例がないことから、はたして縄文時代の当該期のものかどうかとも検討しなくてはならない。

ただ、日本列島に玉質の石材が多く、かつその加工技術（研磨、穿孔）が古くから存在していたことは注目すべき点である。

では、丁寧に磨かれ光沢をもち緻密な玉製品が、安定して登場するのはいつかというところ、やはり確実なのは縄文時代早期末（約 7,000 年前）ころということになる。

縄文時代早期末がおそらく玉製品の出現期と考えてよいのは、現在類例が多いということもあるが、①器種として安定して存在していること。②いくつかの器種があり、それらの組み合わせ（セット）の存在がうかがえること。の 2 点が主な根拠である。

玦状耳飾を中心とした玉製品がセットで出現したことを筆者は重視するが、実は玉質の装身具はさまざまな器種があるが、研究史上玦状耳飾がとくに重視されて論じられてきたので、まず玦状耳飾の研究史を概観したい。

#### 4. 玦状耳飾研究史

すでに述べた国府遺跡で人骨に伴って出土したことで有名な玦状耳飾は、研究史上、当初は石環と呼ばれていた（大野 1911）。しかし、その後、柴田常恵（1917）・谷川（大場）磐雄（1924）らによって玦様の石製品とされた。C 字形石製品とでもすべきところをわざわざ中国の玉器の玦の字をあてたところから、すでに、中国の影響を見ていたわけであるが、とくに論拠は示されていない。これは国府遺跡の玦状耳飾に関する議論（喜田貞吉・内藤湖南ら）でも、こうした美しい装身具が、日本列島の石器時代人に作れるはずもないという予見からなされたものらしい（喜田 1918・梅原 1971）。

ただ、このころも玦状耳飾の所属時期が考古学的によくわかっていなかったこともあり、鳥居龍蔵は古墳時代の銅製の耳環の先駆、同系統のものと位置付けていた研究者もいた（鳥居 1923）。これは、さすがに梅原末治（1922）、谷川磐雄（1924）、藤森栄一（1930a・b, 1935）らの研究によって石器時代、とくに縄文時代前期の遺物であることがわかってきて、とくに弥生時代にこうした耳飾が見られないことから古墳時代以降の耳環とは直接つながらないものであるという見解が一般化したようである。

しかし、鳥居が耳環の風習を東北アジア起源と予察し、ロシアや北朝鮮に玦状耳飾の源流を求めたことは、後述するように、年代論としては問題があったが、具体的に用途も含めて大陸の文物と比較した点で興味深い。

梅原末治の集成後、樋口清之の集成と編年がある（図 3-1,2）（樋口 1932a・b）。樋

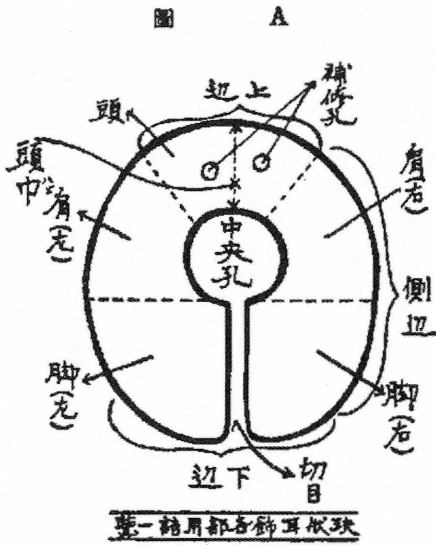


図 3-1 珧状耳飾部位呼称

圖式型飾耳狀珧

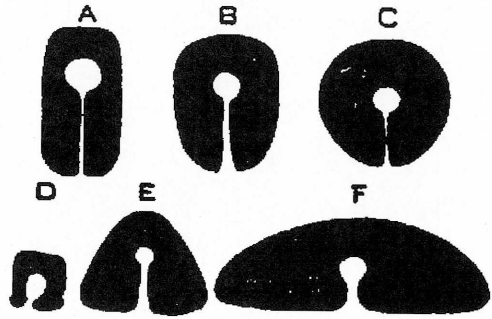


図 3-2 珧状耳飾型式分類

口の研究は戦前の研究の一到達である。樋口は全国の類例を集成しただけでなく、型式分類も行った。樋口の分類は現在も基本的に有効で、樋口以前には、直感的に古代中国（漢代）の玉器と類似するとみて、日本の石器時代（縄文時代）が漢代あたりという今から見ればかなり大まかな議論であったが、樋口は、全国にさまざまなバリエーションがあることをとらえ、そのバリエーションが年代差であることを予見し、さらに地域的な特色もすでに見出している。ただ、おしむらくは、樋口の研究は当時発達しつつあった層位的事例に基づく縄文土器型式編年とどのように対応するか明確ではなく、おもに型式学的変遷から珧状耳飾の編年を構築したため、今からみれば樋口が新しいとしたものが古く、古いものが新しいという逆の変遷を示している。

しかし、樋口は珧状耳飾が縄文時代の遺物で、古墳時代以降の耳環とは関係がないことを改めて確認した。樋口の研究のあと、珧状耳飾は日本列島の中で自生したものという認識が広まる結果となったようである。但し、樋口は「玉」（硬玉・ヒスイ）の素材自体はビルマから来たと想定しており（樋口 1937）、軟玉で作られた珧状耳飾もすべて日本列島自生と考えていたかはわからない。（硬玉同様、軟玉も日本列島で産するかどうかよくわかっていなかった。）

戦後は、遺跡での遺構に伴う層位的発掘の成果が反映されるようになり、樋口の編年に疑問がまず唱えられたほか、さらに縄文時代の実年代をめぐる論争に珧状耳飾が登場することとなる。

おもに大陸との文物との比較によって縄文時代の年代を構築していた山内清男

は、玦状耳飾も大陸文化と関係がある遺物として重視し、縄文時代前期と中国江南の青蓮崗文化の玦状耳飾を対比し、日本列島の玦状耳飾が大陸起源であるとした(山内 1969)。一方、縄文時代の年代を放射性炭素 14 の半減期を利用した理化学的年代測定法に基づいて構築していた芹沢長介は、青蓮崗文化は炭素 14 年代でおよそ(紀元)前 2,000 年(B.P.4,000 年)くらいであるのに対し、縄文時代前期初頭は(紀元)前 3,000 年(B.P.5,000 年)くらいであるから、理化学的年代から見れば、日本列島の玦状耳飾が中国大陸に伝わってしまう結果になるとし、また縄文時代早期に骨角製の耳飾があるので、日本列島で自生したものであり、両者の相似は「無関係の類似」とした(芹沢 1965)。その後理化学的年代測定法による縄文時代の年代が有力となり、西日本に玦状耳飾が少なく、東日本におおいことや他の文化要素が伝わった形跡がないなどの反論が出され(渡辺 1973)、日本列島自生説に有利に展開するようにも見えた。

しかし、藤田富士夫は、従来概念的に示されることがあった玦状耳飾の編年を「型式率」という玦状耳飾のスリットの長さの長短を基準としたデータで整備し、青蓮崗文化より古い河姆渡文化(B.P.8,000 年)に玉玦が伴うとし、芹沢がいうような炭素 14 年代測定法に基づいた年代観でも、中国と日本列島で年代が逆転することはないとした(図 4)(藤田 1978・1983)。

藤田の説に説得力があったのが、従来は非常におおまかに中国の玉器である「玦」と日本の玦状耳飾を対比していたのだが、日本列島の玦状耳飾の編年を整備し、その最古段階にある指貫型や金環型(図 5)が河姆渡文化(河姆渡遺跡)に見られるとし、さらに日本列島でも中国江南でもこうした切り目(スリット)が狭いものから長いものに、断面形は分厚いタイプから扁平なタイプ(いわゆる玦型)へ変化するという点を指摘したことにある。

ただ、最古段階の玦状耳飾や玦状耳飾製作遺跡がいずれも北陸にあることから、北陸に河姆渡文化の玦状耳飾が伝播したとしたが、その中間の西日本で藤田のいう最古段階の類例がないことや他の文化要素が伝わった形跡がないなどの渡辺誠の反論に対してはまだ課題を残した(渡辺 1973)。

起源や伝播経路の問題については、後述するが、中国東北地方にも古い玦状耳飾の類例が紹介され(方 1991, 遼寧省 1994, 中山 1994)、中国江南と日本列島との比較だけではすまない状況も出てきた(中山 1992)。

東アジア全体に広がるとなると、玦状耳飾自体は非常に簡単な形をしていて、機能的要請(耳に穴をあけてぶら下げる)から似てくる可能性も説得力があるものになってきて、大陸起源説と日本列島自生説のいずれも説得力はあるが、決め手に欠いていた。

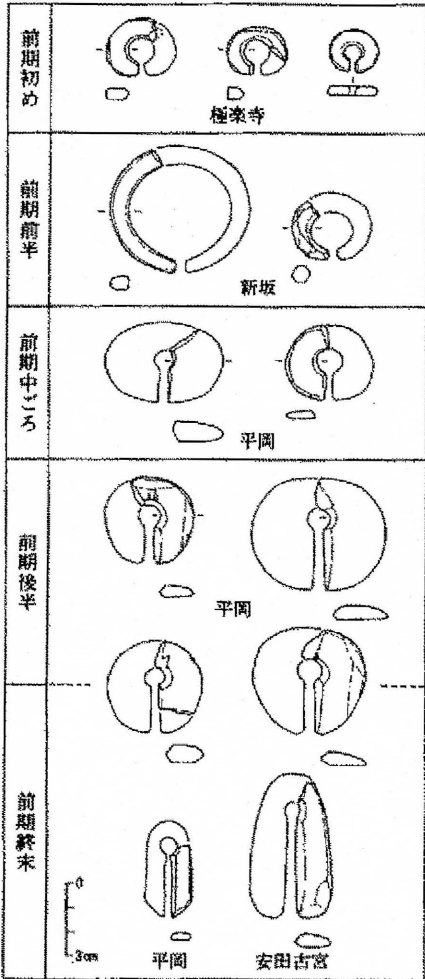
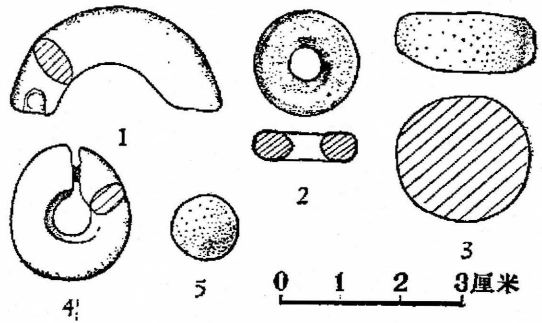


図4 塊状耳飾 (藤田編年)



第四層玉石装飾品

- 1. 璜 (T18④:62)
- 2. 玉珠 (T20④:26)
- 3. 餅 (T2④:39)
- 4. 玉瑛 (T1④:86)
- 5. 丸 (T2④:59)

図5 河姆渡遺跡出土玉石器

### 5. 装身具セット

筆者は塊状耳飾が縄文時代前期の装身具として有名であり、国府遺跡の例でもわかるように被葬者が身につけていた可能性が高いので、墓の可能性のある土坑から出土した塊状耳飾を集成したところ、塊状耳飾が出土した土坑と同じ群の別土坑から塊状耳飾と似た石材で作られた垂飾（管玉、斧形など）が出土することがわかった。塊状耳飾と他の玉質装身具が同じ遺跡で出土することは珍しくないが、遺構レベルでみると同じ土坑で共伴することはほとんどない（竪穴住居跡などでの共伴は別）ことがわかった（川崎 1994）。

このことから、個人レベルでは複数器種を装着することはあまりない。多くの土坑群の中で装身具が見つかるのは1割以下なので、限られた人しか装着していなか

った可能性が高く、性差や職能などを表していると考えた。

一方で注目すべきは、玦状耳飾以外の垂飾と想定される装身具の多さである。これらは玦状耳飾と同一あるいは類似した石材で作られている。こうした玦状耳飾以外の装身具について集成する中で、たとえば長野市松原遺跡（図 6）と八丈島倉輪遺跡（図 7）の装身具が玦状耳飾の形状だけでなく、遺跡で共伴した斧形垂飾（篋状垂飾）、「の」字状石製品などの装身具が共通する石材（蛇紋岩）で作られ、形態的特徴も酷似していた。

松原遺跡と倉輪遺跡が縄文時代前期末から中期初頭という共通した時期の遺物を含んでいたということであるが、松原遺跡でも倉輪遺跡でも未製品が全くなく、蛇紋岩の産地が近隣にあるわけでもないことから、第三の場所（具体的には玉質の石材は広域変成帯で産出するので、その付近でかつ未製品が多量に出土した遺跡がある北陸が想定される）で製作されたものが流通している可能性が高く、とくに「の」字状石製品を調べたところ、広く汎日本列島全体に比較的形態的特徴が共通するものが分布することが明らかになり、玦状耳飾だけでなく、当時同様な石材で作られていた玉製品の装身具は、セットで流通していたのではないかと推測した。玉製品の装身具をセットとして把握してみると、玦状耳飾同様に他の器種も変遷することがわかってきた（図 8-1,2）（川崎 1996）。

現在広域に分布するセットとしては、大まかに 3 段階ぐらいが想定されている。①桑野型（玦状耳飾・管玉・篋状垂飾）（図 9）、②根古谷台型（玦状耳飾・管玉・垂飾）（図 10）、③倉輪・松原型（玦状耳飾・篋状垂飾・「の」字状石製品など）（図 6・7）である。他にも地域的なセットの存在も想定され、興味深いのが今のところ汎列島の分布するものはこの 3 段階でおおよそ説明できる。



図 6 松原遺跡出土玉製品



図 7 倉輪遺跡出土玉製品

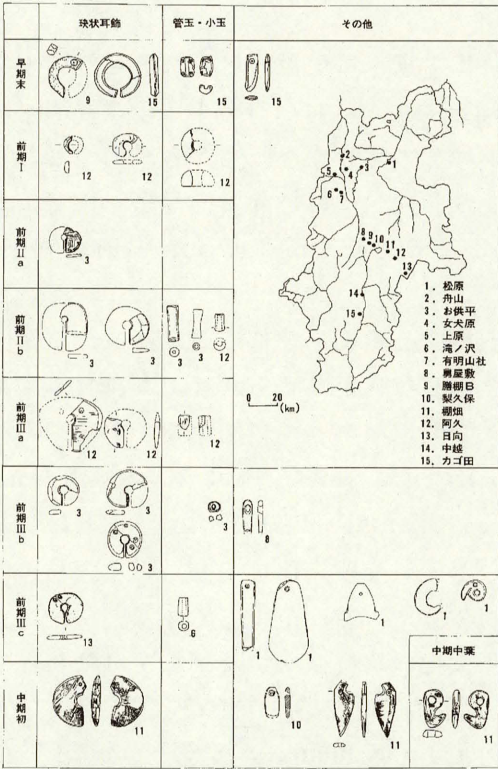


図 8-1 玉製装身具変遷図

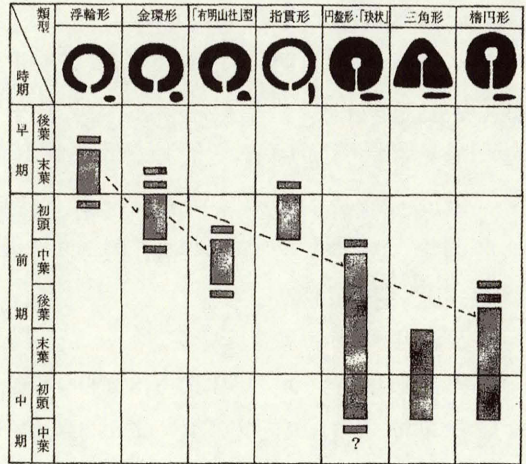


図 8-2 球状耳飾編年模式図



図 9 桑野遺跡出土玉製品

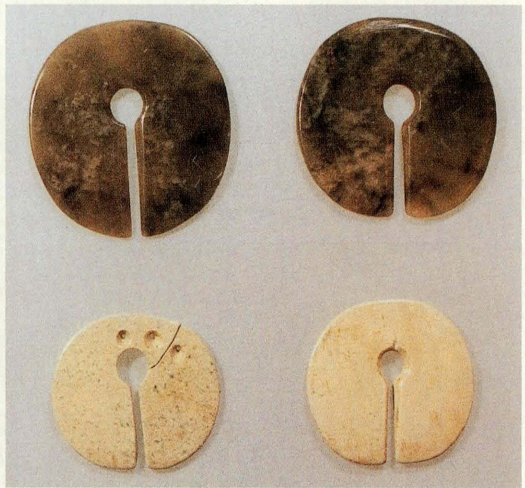


図 10 根古谷台遺跡出土球状耳飾

## 6. 玦状耳飾など玉製品の起源

とくに起源の問題で注目すべきは、縄文時代早期末に位置づけられる桑野型である(川崎 1997)。これとほぼ同じセットが中国東北部(図 11・12)とロシア沿海州(図 13)で見つかっている。今までは玦状耳飾単体での比較であったから、前述したように機能的要請による「他人の空似」の可能性を完全には排除できなかったが、セット関係での形態の類似は、文化的に関係がある可能性が高まった(川崎 1998・1999・2002・2003a)。

とくに年代を比較するとこうした玉製品を有する中国東北部の興隆窪文化(興隆窪, 查海遺跡など)は B.P.約 8,000 年前後という年代が与えられており、日本の縄文時代早期末(B.P.7,000 年)より古い。また中間地域のロシア沿海州でも早期新石器時代のルドニン文化(Руднинская Куритура)のチョルタヴィ・ヴァロタ(Чертовы ворота) 洞穴などで発見されている(Андреева 編 1991, 川崎 2004b)。筆者は、最古の段階の玦状耳飾や筥状垂飾が查海遺跡などの興隆窪文化を中心に日本列島に波及したと考えた(図 14-1,2)(川崎 2002)。

鄧聰も、炭素 14 年代などを根拠に興隆窪文化の玦飾(玦状耳飾)をはじめとする管状珠(管玉)、匕形器(筥状垂飾)といった玉器(玉製品)が東アジアで最古で、これらが東アジア全体に広がったとする(図 15)(鄧 2000)。

鄧は形態的類似や筆者の主張するセット関係だけでなく、製作技法について着目し、中国大陸全般や日本列島の一部でも擦切技法以外に糸切技法が用いられてい

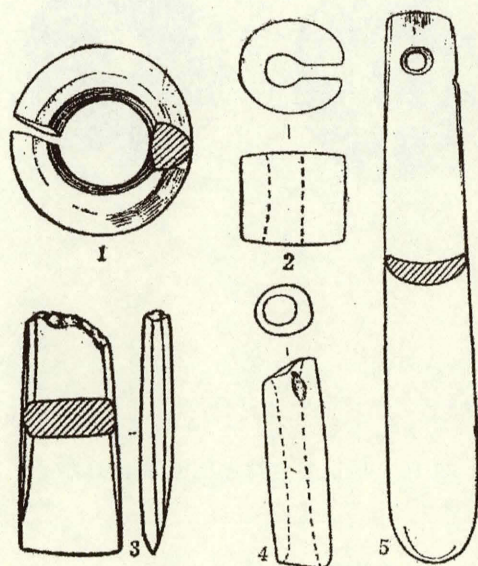


図 11 查海遺跡出土玉製品

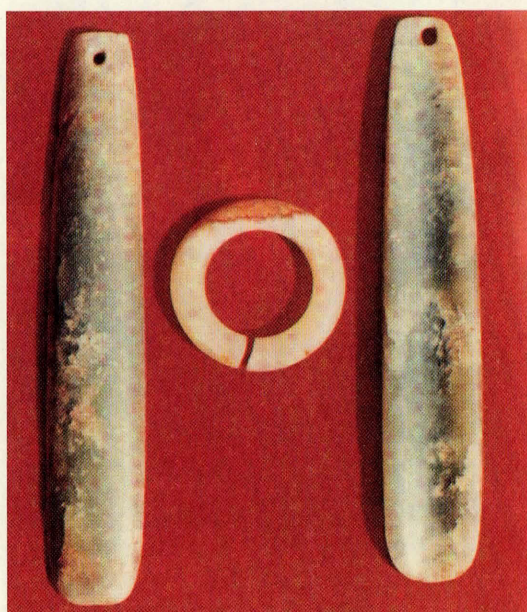
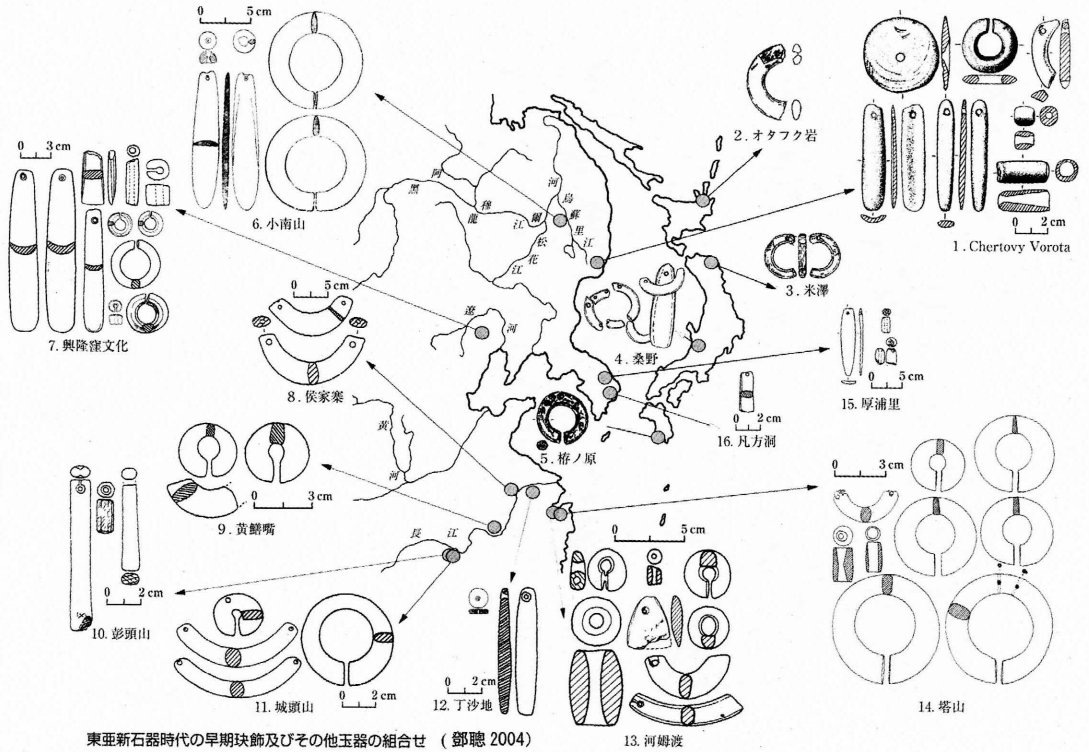


図 12 錫本包楞遺跡出土玉製品





東亞新石器時代の早期玉製品及びその他玉製品の組合せ (鄧聰 2004)

図 15 アジアの玉製品の広がり

ることを明らかにし (図 16-1,2,3,4,5) (鄧ほか 2005a・b, 鄧 2007), これらが, 興隆窪や河姆渡文化に見られることから, 中国東北部と江南地方の玉器が関連するものであることを明らかにした。また鄧は中国での玉器の起源を江南の河姆渡文化とする見解に対しても, 興隆窪文化の方が古いだけでなく, セットの器種が多いことを指摘し, 河姆渡文化へ伝わる段階で一部が欠落したものとし, 中国東北部地方の文化が波及したものと推測している (鄧 2004)。筆者も鄧の意見に賛成である。土肥孝は (土肥は大陸起源説ではないが), 初期の玉製品はいずれも骨角製品に形態が類似し, 骨角製品の装身具を起源とする可能性を指摘する (土肥 1997)。土肥の指摘には同感で, 桑野型の玉製品に見られる列点状の刺突や断面形が湾曲した篋状垂飾, 根古谷台遺跡などの管玉の形態などは, 骨角製品にみられる特徴や骨の形態を模したものとみることができよう (川崎 1998・1999)。仮に骨角製装身具に玉製装身具の起源があるとすると, 後期旧石器時代から早期新石器時代にかけて骨角製品が見られるのは中国華北以北の地域である (松藤 1994)。中国東北部装身具をはじめとする玉製品が出現したとする見解の傍証になろう。

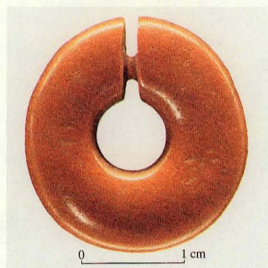


図 16-4 河姆渡遺跡出土玉玦

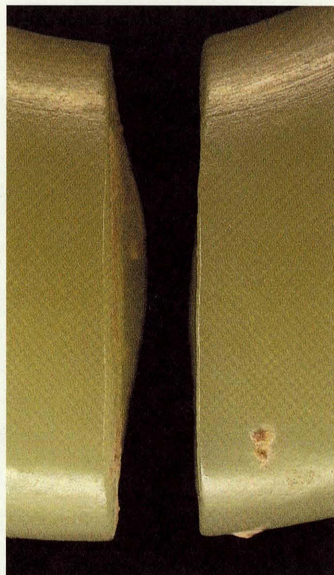
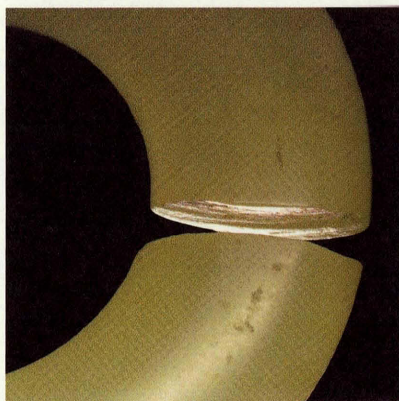
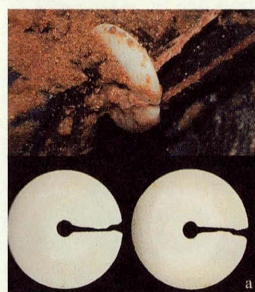


図 16-1,2,3 興隆窪遺跡 130 号墓出土玉玦およびスリット拡大



a・b 実験

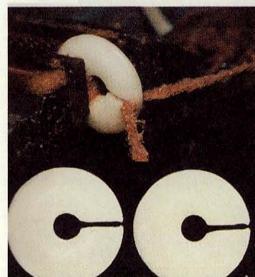


図 16-5 糸切技法の実験と出土資料の比較

## 7. 伝播ルートの検討

東アジアという大きな範囲の中でのおもに装身具を中心とした玉製品は、年代、型式学的変遷、セットなどから概観したように中国東北地区にある可能性が高いと筆者は考える。しかし、日本列島に中国東北地区から仮に沿海州を経由したとしても、縄文時代早期末には直接日本海を横断できるような渡海手段があったとは想定しにくい。

日本列島への伝播という問題を考えた時に、海を渡ったとしても、朝鮮半島経由か北海道経由のルートをまず検討すべきであろう。

さらに、現在、従来類例がほとんど知られていなかった朝鮮半島南部でも東三洞貝塚、沙村里遺跡、文岩里遺跡などで玦状耳飾が知られているだけでなく、おそらく早期新石器時代と思われる筥状垂飾や管玉が厚浦里遺跡で出土している。いずれも朝鮮半島東海岸であるので、ルートを考える上で参考になる。日本列島内での状況としては、以前は類例が少なかった九州や中四国でも古い形態の玦状耳飾が出土していることも朝鮮半島経由である可能性は捨てきれない（川崎 2006）。ただ、残念なことに朝鮮半島の類例は日本や中国の玉製品の変遷と比較すると比較的新しい段階のものが多く、とくに確実な興隆窪文化やルドニン文化でも見られる桑野型装身具セットは確認されていない。玦状耳飾の形態だけでいうと比較的新しい段階のものである。

一方、北海道を経由するルートであるが、土器に共伴した最古の玦状耳飾は北海道浦幌町共栄 B 遺跡（早期後葉）から出土している。共栄 B 遺跡も含まれる北海道東部では縄文時代早期に東北アジアに広く分布する石刃鏃文化が広がっている。また、中国東北部だけでなく、ロシア沿海州のルドニン文化には石刃鏃が伴うことが知られており、東北アジアの石刃鏃文化には玉製品が一定量伴うようである。玦状耳飾などの玉製品が北海道経由で伝わった可能性も考えなくてはならない（麻柄 1998）。

今のところ量的にセット関係が明らかで、かつ周辺に未製品を大量に出土した遺跡（いわゆる製作遺跡）は、北陸地方（石川県三引遺跡、富山県極楽寺遺跡など）に限られている。中央高地（長野県）に製作遺跡が見られるようになるのは、玦状耳飾の形態から考えると前期中葉以降ということであり、地域の変異が著しい器種やセットは前期後葉からということを見ると、いずれにせよ、極めて早い段階に北陸に玉を含む玉質石製装身具製作技術が列島外から伝わり、ここからの製品が列島内に広がったものと筆者は考える。

筆者は今のところ北海道や西日本を経由したとしても、基本的には北陸以外の地域では玉製品製作技術を安定して、受け入れることはなかったものとする。

## まとめ 玉製品出現の意味

玉製品の出現によって、見えてきたことを簡単にまとめたい。

### ① 副葬品とそのバリエーションの出現

大阪府国府遺跡(図 17) や神奈川県上浜田遺跡(図 18-1,2) の例でわかるように、玦状耳飾は、墓に装着した状況に近い形で副葬されたことが推測される。さらに玉製品やこれと同形態の石製品が出土した土坑を検証したところ、墓域の中で特定の墓穴からしか出土しない(栃木県根古谷台遺跡・図 19-1,2)、複数の器種が共伴することはほとんどない(表 1)、などの特徴が見られた。こうした現象は縄文時代早期末以前には見られないことであり、とくに前者は、集団の中で区別される人が存在したことが推測され、また後者は性や職能差であるのかもしれない。

### ② 海の利用の活発化

貝塚が全国的に出現し、丸木舟も各地で出土するようになることから、従来から縄文時代前期になると海の利用が活発化することが推測されてはいた。さらに、玉

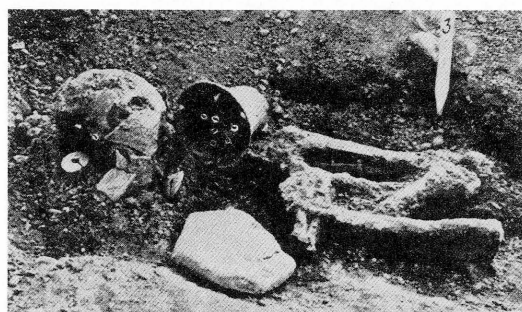
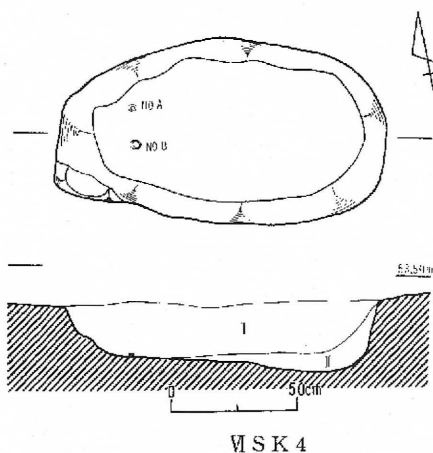
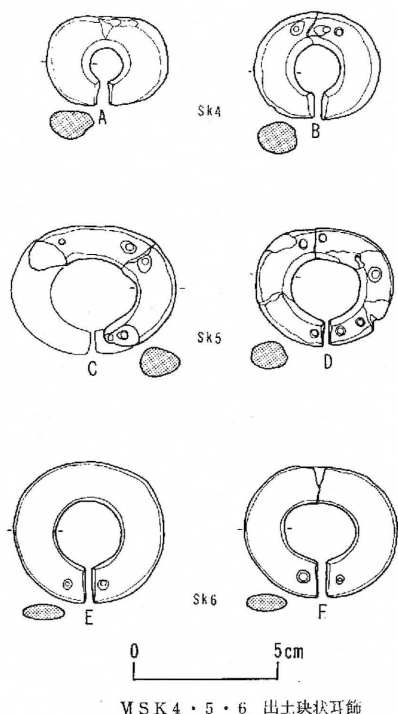


図 17 国府遺跡玦状耳飾出土状況



MSK 4



MSK 4・5・6 出土玦状耳飾

図 18-1 上浜田遺跡土坑 SK4 玦状耳飾出土状況

図 18-2 上浜田遺跡出土玦状耳飾

製品は、内陸部だけではなく、八丈島や隠岐などの島嶼にも分布している。もちろん旧石器時代から黒曜石が、隠岐、姫島や神津島などといった島嶼からもたらされたことはよく知られているが、これが汎日本列島のに広まっているわけではない。

早期に玉製品ではないが、異形部分石器（トロトロ石器）という石器がある。一見石鏃に似ているが、先端は丸く加工され、石鏃としての用途はなさない。石材も色や斑の入り方にまで特徴が共通するチャートやメノウ（玉髓）を利用し、この時期石器に広く用いられる黒曜石や頁岩、ガラス質安山岩はまったく用いられない。



図 19-1 根古谷台遺跡遺構配置図

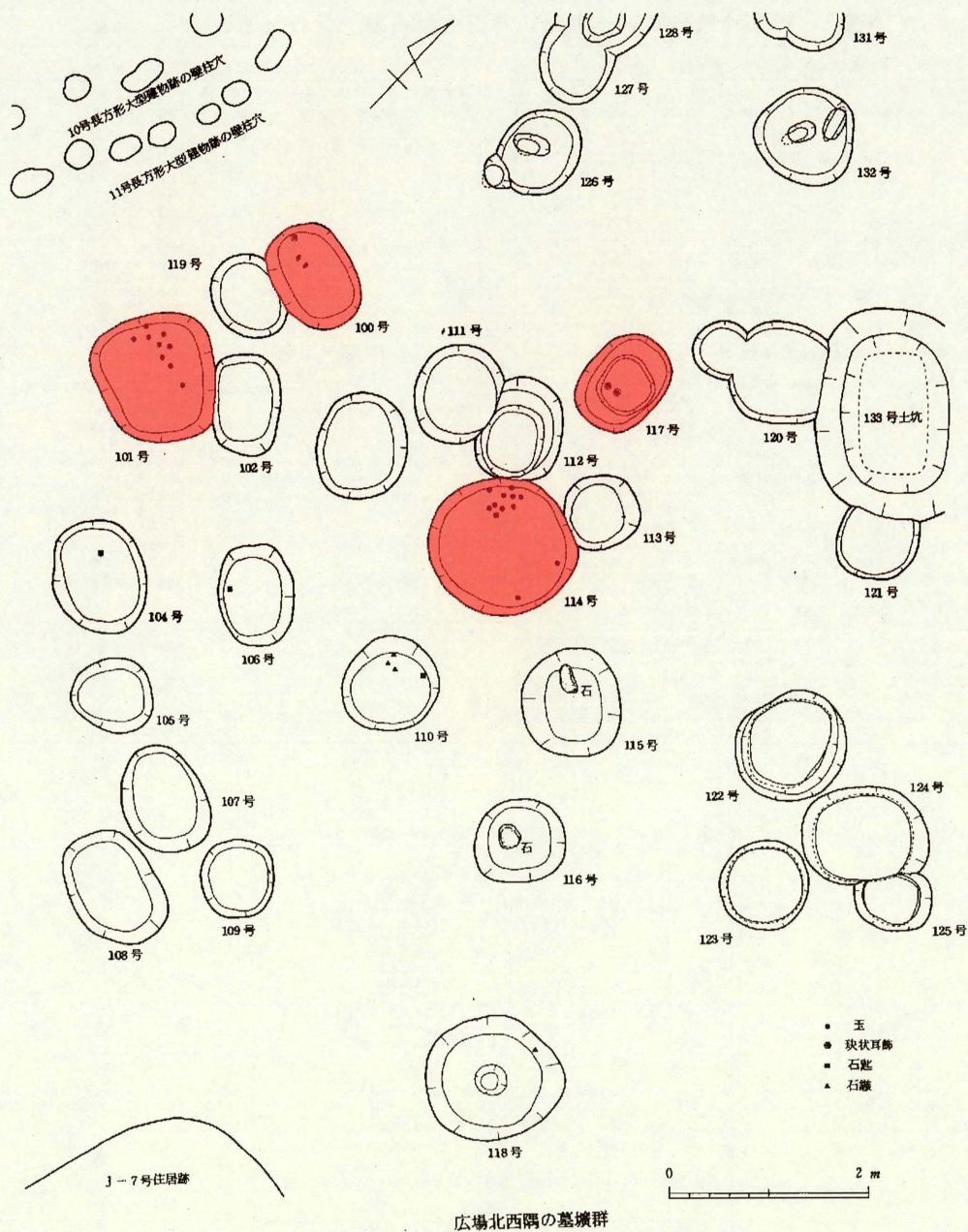


図 19-2 根古谷台遺跡墓穴群 (トーンは玉出土土坑)

チャートやメノウも剥片石器に用いられるような場合、異形部分磨製石器のような色や斑の入り方などといった表面的な特徴はかならずしもある訳ではない。大きさは10センチ程度のものから2センチ弱のものがある。こうした特徴は、異形部分磨製石器が利器ではなく、装身具あるいは小林達雄のいう「第2の道具」に相当する

表1 縄文時代早期末～中期初飾玉出土遺跡一覧表(その1～3)

表1 縄文時代早期末～中期初飾玉出土遺跡一覧表(その1)

遺跡名	所在地	遺構の名称	時期	備考
緑野1	北海道旭川市		前期後葉?	瑛状耳飾2(乳白色玉質)ペンガラ、石鏝、つまみ付きナイフ(シフ/ツナイ式)
美々5	北海道千歳市	墓墳P29	前期前半	瑛状耳飾1(瑪瑙)石斧、石槍、スクレイパー、つまみ付きナイフ
		MP-49	前期	瑛状耳飾1(瑪瑙)石斧、つまみ付きナイフ
熊の谷貝塚	北海道室蘭市		中期?	瑛状耳飾1(蝸骨または白色石)
北島	北海道釧路市	墓墳	前期前葉	垂飾1(密鑿)陶文式) 縦長石匙2、磨製石斧1
館野	青森県三戸郡福地村	第4号土坑	前期前期末葉から中期	瑛状耳飾1(緑色ホルンフェルス)
長谷高城	山形県長井市		前期初	瑛状耳飾2(瑪瑙)
歌浦	山形県海部郡遊佐町	SK 522	前期後葉?	有孔磨製石斧1(緑泥片岩)(大木5式)
		SK 1087	前期後葉	瑛状耳飾1(大木5～6式)
		SK 1095	前期後葉	瑛状耳飾1(硬玉)(大木5～6式)
		SK 1203	前期後葉	玉斧1(硬玉)
		SK 1008	前期後葉～中期初	玉斧1(硬玉)
SK 1013	前期後葉	玉斧1(大木5～7a式)		
二ノ鼓	山形県米沢市	DY 2 DY 3	前期初 前期初	管玉2(白褐色滑石)、石鏝4 管玉6(白褐色滑石)、石鏝4、石匙1、石離1、尖頭器1
下道D	秋田県秋田市	6号壇土遺構	前期	瑛状耳飾1
(参考・上ノ山II)	秋田県仙北郡協和町	大型住居址群南側斜面	前期後葉～中期?	瑛状耳飾50(内住居址より2)、燕尾形石製品58、カッポン形石製品70、大木4～5a式?
蔵谷地B	福島県双葉郡葛尾村	土坑第53号	早期末～前期前葉	瑛状耳飾2(滑石片岩)
		土坑第59号 土坑第65号	前期前葉	瑛状耳飾2(滑石片岩)、石鏝 瑛状耳飾1、装身具素材(滑石片岩)
菅宮西	福島県大沼郡会津高田町	SK-47	前期後葉	瑛状耳飾1(密鑿岩)、簡し穴?(大木5式)
丸山	福島県郡山市	38号土坑	前期?	瑛状耳飾1、打製石斧、石匙、石鏝
中野谷松原	群馬県安中市		前期中葉から後葉	瑛状耳飾が土坑から出土。遺構外から丸玉、管玉、玉斧など出土。

表1 縄文時代早期末～中期初飾玉出土遺跡一覧表(その2)

遺跡名	所在地	遺構の名称	時期	備考
石山神	茨城県西茨城郡友部町	SK 97	前期	垂飾2(琥珀)
根吉谷	栃木県宇都宮市	100号墓墳	前期中葉	瑛状耳飾2(緑白、乳白)
		117号墓墳		瑛状耳飾2(密鑿)
		101号墓墳 114号墓墳		管玉6、丸玉2(乳白) 管玉6、小玉5(乳白)、石匙1
北新田	埼玉県浦和市	12号ファイアービット	早期末	瑛状耳飾?1、管玉1(滑石)(条紋文土器)
藤森	埼玉県上福岡市	217号土坑	前期後葉?	瑛状耳飾1
		363号土坑	前期後葉	瑛状耳飾1(輝石式)
		52号土坑	前期	棒状の飾玉1、石匙1
		361号土坑	?	小玉2(密鑿岩)
		388号土坑 370号土坑 482号土坑	前期	垂玉(管玉?)1 丸玉(小玉)1 丸玉(小玉)1、石匙1
打越	埼玉県富士見市	267号墓墳	前期初	瑛状耳飾1
ハクナ穴	千葉県千葉市	土坑15号址	前期後葉?	瑛状耳飾2(滑石)
		土坑33号址	前期後葉?	瑛状耳飾1(滑石)
上原田	神奈川県海老名市	SK 4	早期末	瑛状耳飾2(滑石)
		SK 5		瑛状耳飾2(条紋色)
		SK 6		瑛状耳飾2(滑石)
笠原高原	神奈川県川崎市	第2号土壇 第3号土壇	中期初? 中期初	瑛状耳飾2(条紋岩、滑石) 瑛状耳飾1(滑石)
茅ヶ崎貝塚	神奈川県横浜府	P 43	前期～中期初	瑛状耳飾1、石匙 半玉、管玉、石鏝、磨製石斧出土土坑有り
北川貝塚	神奈川県横浜府	P 55 P 73	前期後葉	人骨の肩部分近より管玉(滑石) 瑛状耳飾1(密鑿c式)
多摩-ムーンクワン	東京都多摩市		前期後葉?	瑛状耳飾2個土坑より出土
倉輪	東京都八丈町	第2号人骨	前期末中期初	棒状垂飾が壯年女性の後頭部付近より出土(緑白色)
吉録	新潟県南魚沼郡湯沢町	B 3区10号	前期後葉	瑛状耳飾2(乳白色密鑿岩)(密鑿b式)
		土壇264 234 219	前期	管玉(滑石) 管玉(滑石) 垂飾(滑石)

表1 縄文時代早期末～中期初飾玉出土遺跡一覧表(その3)

遺跡名	所在地	遺構の名称	時期	備考
お旗塚	長野県上水内郡信州新町	105号土壇	前期後葉(密鑿b式)	瑛状耳飾2個、石鏝、石匙、磨製石斧、磨石、石血
梨久森	長野県岡谷市	723 P	中期?	管玉1(滑石)、焼骨を伴う
		296 P		垂飾5(琥珀)、管玉1(滑石)
		331 P		大珠1(密鑿)
		257 P		大珠1(密鑿)
		256 P		垂飾1(琥珀)
		307 P 608 P		垂飾1(琥珀) 垂飾1(琥珀)
かご田	長野県下伊那郡飯島町	P 171 P 166 P 114 P 323 P 283	早期末	瑛状耳飾1、石鏝1(大部分滑石) 瑛状耳飾2 瑛状耳飾1(住居址?) 瑛状耳飾3 管玉1
中野	長野県小県郡東部町	SK 132	前期後葉	管玉1(滑石?)
藤畑	長野県茅野市	310号土坑	中期初	瑛状耳飾1
由尻	長野県飯田市	小窪穴	前期末～中期初	瑛状耳飾の半欠品の垂飾2(密鑿岩)
紙巻堂	山梨県東八代郡一宮町	SK 218	前期	瑛状耳飾1(SB 42住居址出土?) (北白川下流式)
		SK 46	中期前葉	瑛状耳飾1(磨内式)
美輪	山梨県北巨摩郡大泉町	429号土壇	前期中葉	大珠1(密鑿)(密鑿c式)
		321号土壇	前期中葉	瑛状耳飾1、半欠品垂飾1、(密鑿b式)
馬場山D	富山県下新川郡朝日町	9号穴	前期末葉	垂飾1(滑石)、未製品
吉録	富山県中新川郡立山町	第4号ピット	前期中葉から後葉	瑛状耳飾1
甲・小等	石川県鳳至郡穴水町	墓址ピット	前期前葉	瑛状耳飾1(瑪瑙質)、磨製石斧
藤野	福井県坂井郡金津町			瑛状耳飾、石鏝状装飾石器、飾玉が土坑より多数出土
南府	大阪府藤井寺市	第3次4号女性人骨 13号女性人骨 14号女性人骨 第4次2号人骨 3号人骨 4号人骨	前期	瑛状耳飾2(濃緑色滑石)
				瑛状耳飾2(滑石?・粗玉)白玉
				瑛状耳飾2(玉)
				瑛状耳飾2(滑石)
				瑛状耳飾2(密鑿岩?・軟玉) 瑛状耳飾2(滑石)

ものだと考えられる（川崎 2003a・2007c）。

この異形部分磨製石器は、押型文土器の分布域を中心に、九州から長野県あたりまで広く分布する。縄文時代前期以前では、広域に分布する石器であり、玉製品同様に利器ではなく、玉製品と違って製作遺跡が未発見であるが、チャートという玉（透緑閃石岩、蛇紋岩、滑石など）同様に広域変成帯で産出する石材を利用するなどという共通点があり、玉製品と対比するには適当な資料であると考えられる。この異形部分磨製石器は、玉製品とことなつて主に中央構造線沿いの山間部に多く、平野部にも存在するが少なく、島嶼での出土はほとんど知られていない（図 20-1,2）（川崎 2007a・b・c）。

これは、異形部分磨製石器の用途が、玉製品のような装身具ではなく、信仰や祭祀にかかわる石器であることによるのかもしれないが、縄文時代前期以前には、島嶼との往来はあつても、物資が全国的に海を利用して移動することは少なかったことを示していよう。

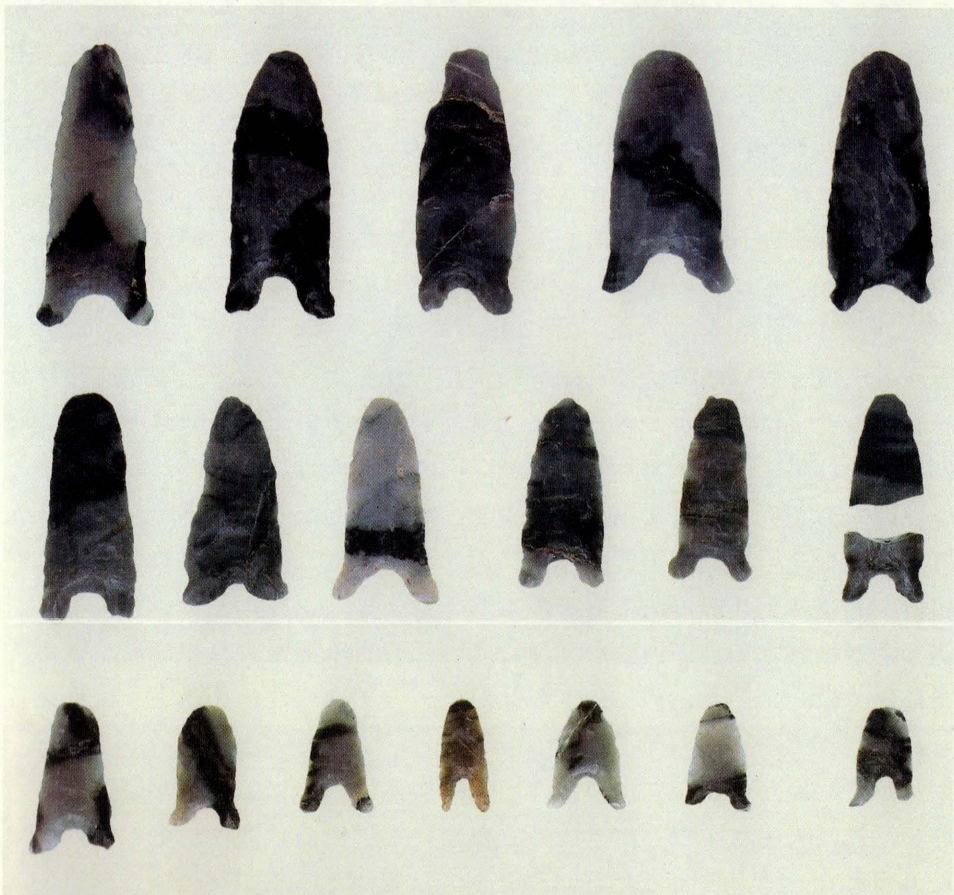


図 20-1 異形部分磨製石器

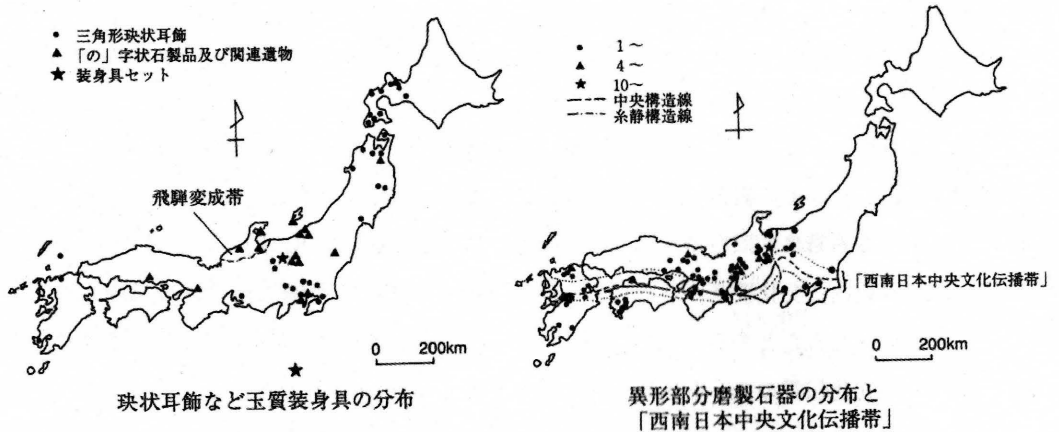


図 20-2 珠状耳飾など玉製品と異形部分磨製石器の分布の比較

### ③ 内的な発展か外的な要因か

すでに触れたように国府遺跡などの調査で日本列島では、珠状耳飾が「耳飾」として用いられていたことが推測されているが、これは中国でも同じ用途であることが、興隆窪遺跡などの調査で判明している。個々の器種の型式学的な類似、組み合わせ(セット)の共通性だけでなく、用途も類似していることから、彼我的関係が、無関係の類似ではないと考えられよう。

文化的な影響というのは、人的往来なくしては生じないものではあるが、これが日本列島の縄文文化にどのような形や規模で、どの程度影響を与えたのかは、よくわからない。

玉製品の出現とほぼ同時に墓に副葬品が見られるようになる。縄文時代早期にも墓と思われる土坑はあるが、明らかに副葬品とわかるようなものは極めて少ない。さらに定住的な集落遺跡が発達し、墓域が明確に形成されるようになるなど、玉製品の出現は、ちょうど縄文文化の中での一大画期にあっている。

仮に玉製品やその文化の影響を非常に大きくとらえれば、縄文時代早期末以降の文化要素が大陸文化起源である可能性もあろう。

しかし、逆に日本列島の内的な発展段階が、ちょうど玉製品やその文化が入ってきた時期に一致していたために、玉製品がはいってきて変化したように見えるだけかもしれない。

いずれが正しいかはわからないが、もし玉製品について文化的な影響があったとすれば、これは人的往来なしには成り立たないことが、見込まれる。それは単に珍しいものが渡来して、広まったということではないだろう。なぜなら形態やセットの類似にとどまらず、用途、石材の選択、製作技術などの分野においても大陸文化

との共通性が見られるからである。

経路の問題でも触れたが、日本列島の玉製品の出現期（早期末）では、大量出土および未製品出土遺跡がいずれも北陸に集中しており、朝鮮半島・西日本あるいは北海道・東日本といった地域に北陸のような遺跡がない。日本海を直接渡るようなことが想定できないとすれば、当初、北陸以外の地域では玉製品生産自体は、在地の集団に広く受け入れられることがなかった。玉製品自体は出現期に列島全体に広まっているが、すでに述べたように早期末以前の列島に広域にひろがる遺物の分布とは様相が異なる。このことと、丸木舟が遺跡から出土するのは、主に縄文時代前期以降であることを考えると、玉製品の文化を担った人々が海を移動することを得意としていたのではないか（川崎 2007c）。

人間集団の移住移動といった問題をこうした断片的な考古資料で語ることは非常に難しいことであるが、縄文文化というと日本列島内の内的な発展段階によって生じたと考えていた文化要素を、外的な要素に起因すると考えてみる必要があることを指摘しておきたい。

## 注

- (1)簡単にいうと美しいもの。鉱物としての透閃石と透緑閃石の違いは含まれる鉄分 (Fe) の違いだけで、かつては両者を総称して陽起石などと呼んだ時代もあったようだが、陽起石という言葉が、漢方薬などの本草学的概念から来た用語ということもあって現在は岩石学の用語としては用いられない。
- (2)実際には玉（玉）偏の漢字として瑪瑙（メノウ）、琉璃（ルリ）、珊瑚（サンゴ）、玻璃（ハリ）などとさまざまなもの（岩石・鉱物以外のものすらある）が玉に含まれることがある。
- (3)英語などの欧米語でも似たような状況があり、玉は jade であるが一方ヒスイ輝石岩は jadeite、透（緑）閃石岩は nephrite と呼ぶ。古代中国では玉（この場合はネフライトである）を翡翠と呼ぶことがあったようなので、こうした混同がおきたものと思われる。

## 引用参考文献

（日文）

- 梅原末治 1922『鳥取県史蹟勝地調査報告第一冊 鳥取県下に於ける有史以前の遺蹟』鳥取県。
- 梅原末治 1971「史前の玦状耳飾に就いての所見」『日本古玉器雑攷』吉川弘文館。
- 大野雲外 1911「志摩発見の石環に就いて」『東京人類学雑誌』27-5。
- 川崎 保 1994「縄文時代前期の玉と墓」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI。
- 川崎 保 1996『『の』字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて』『長野県の考古学』（財）長野県埋蔵文化財センター。

- 川崎 保 1997「縄文時代の篋状垂飾について—福井県坂井郡金津町桑野遺跡出土資料を中心に—」『信濃』49-4。
- 川崎 保 1998「玦状耳飾と管玉の出現—縄文時代早期末・前期初頭の石製装身具—」『考古学雑誌』83-3。
- 川崎 保 1999「日本海をめぐる二つの遺跡から見た玦状耳飾と装身具」『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』同志社大学考古学シリーズⅦ。
- 川崎 保 2001「三内丸山遺跡出土石製装身具の流通・交流経路の解明」『特別史跡三内丸山遺跡年報』4, 青森県教育委員会。
- 川崎 保 2002「東アジアの中で見た玦状耳飾の起源と展開」『長野県の考古学』Ⅱ, 長野県埋蔵文化財センター。
- 川崎 保 2003a「チョールタヴィ・ヴァロータ洞穴の土器, 装身具および骨角器についての一考察」『立命館大学考古学論集』Ⅲ。
- 川崎 保 2003b『山の神遺跡』長野県埋蔵文化財センター。
- 川崎 保 2004a「縄文時代軟玉製品の起源と展開 (予察)」『玉文化研究』1, 日本玉文化研究会。
- 川崎 保 2004b「極東の玉文化」『季刊考古学』89, 雄山閣。
- 川崎 保 2004c「玦状耳飾系統・起源論概観」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所。
- 川崎 保 2006「中国東北・沿海州から見た縄文玉製品」『東アジアにおける新石器文化と日本』Ⅲ, 國學院大學。
- 川崎 保 2007a「石製装身具セット」『縄文時代の考古学』6巻(ものづくり 道具製作の技術と組織)同成社。
- 川崎 保 2007b「玉類の出現と縄文社会」『日本玉文化研究会発表要旨』栃木県立博物館・日本玉文化研究会。
- 川崎 保 2007c「異形部分磨製石器の分布の意味—「西南日本中央文化伝播帯」の提唱—」『列島の考古学』Ⅱ, 渡辺誠先生古稀記念論文集刊行会。
- 喜田貞吉 1918「河内国府遺蹟最古の住民」『歴史地理』32-4。
- 柴田常恵 1917「玦様の石製品」『人類学雑誌』32-11。
- 芹沢長介 1965「周辺文化との関連」『日本の考古学』Ⅱ, 河出書房新社。
- 谷 和隆 2000『日向林B遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書。
- 谷川磐雄 1924「玦様耳飾に就いて」『考古学雑誌』14-4。
- 土肥 孝 1997『縄文時代の装身具 日本の美術 369』至文堂。
- 鄧 聰 2004「東アジアの玦飾の起源と拡散」『環日本海の玉文化の始原と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所。

- 鳥居龍蔵 1923 「梅原氏の鳥取県報告を読みて」『人類学雑誌』38-2。
- 中山清隆 1992 「縄文文化と大陸系文物」『季刊考古学』38, 雄山閣。
- 中山清隆 1994 「東アジアからみた玦状耳飾の起源と系譜」『地域相研究』22。
- 西田泰民 2000 「縄文時代と東アジア」(坂村健編)『デジタルミュージアム 2000』東京大学総合研究博物館。
- 樋口清之 1932a 「玦状耳飾考—石器時代身体装飾品之研究其一—」『考古学雑誌』23-1。
- 樋口清之 1932b 「玦状耳飾考(二)—石器時代身体装飾品之研究其二—」『考古学雑誌』23-2。
- 樋口清之 1937 「我国「玉」及びその渡来伝播についての考」『国史学』33。
- 藤田富士夫 1978 「玦状耳飾の起源について」『富山史壇』69。
- 藤田富士夫 1983 「玦状耳飾の編年に関する一試論」『北陸の考古学 石川県考古学研究会々誌』26。
- 藤田富士夫 1989 『考古学ライブラリー 玉』ニューサイエンス社。
- 藤森栄一 1930a 「玦状耳飾を出せる諸磯式遺跡(其一)」『信濃考古学会誌』2-1。
- 藤森栄一 1930b 「玦状耳飾を出せる諸磯式遺跡(其二)」『信濃考古学会誌』2-2。
- 藤森栄一 1935 「山国飾玉襍記」『考古学』6-7。
- 麻柄一志 1998 「石刃鏃文化の石製装身具」『富山市日本海文化研究所報』20。
- 松藤和人 1994 「旧石器時代の装身具」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI。
- 山内清男 1969 「縄文草創期の諸問題」『ミュージアム』224 (佐藤達夫編 1974 『日本考古学選書 21 山内清男集』築地書館再録)。
- 渡辺 誠 1973 「装身具の変遷」『古代史発掘 2 縄文土器と貝塚』講談社。
- (中文)
- 安 志敏 1984 「長江下游史前文化对海東の影響」『考古』3。
- 佳木斯市文物管理站・饒河県文物管理所 1996 「黒竜江省饒河県小南山新石器時代墓葬」『考古』2。
- 吳 蘇 1978 「圩墩新石器時代遺址発掘簡報」『考古』4。
- 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館 1978 「河姆渡遺址第一期発掘報告」『考古学報』1。
- 中国科学院考古研究所・西安半坡遺址博物館 1963 『西安半坡』。
- 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1997 「内蒙古敖漢旗興隆窪聚落遺址 1992 年発掘簡報」『考古』1。
- 朝格巴圖 1996 「内蒙古巴林右旗錫本包楞出土玉器」『考古』2。
- 鄧 聰 2000 「東垂玦飾四題」『文物』2。
- 鄧 聰・呂紅亮・陳瑋 2005a 「以柔制剛—砂繩截玉考」『故宮文物』23-1, 国立故宮博物院。
- 鄧 聰・呂紅亮・陳瑋 2005b 「以今鑑古—玉石切割實驗考古」『故宮文物』22-12, 国立故宮博物院。

- 鄧 聰 2007 「以柔克剛—玉器線切割來龍去脈」『玉器起源探索』中國考古藝術研究中心。  
任 式楠 1994 「興隆窪文化的發現及其意義—兼與華北同時期的考古学文化相比較」『考古』  
8。  
方 殿春 1991 「阜新查海遺址的發掘與初步分析」『遼海文物學刊』1。  
楊 虎 1994 「遼西地区新石器—銅石并用時代考古文化序列與分期」『文物』5。  
遼寧省文物考古研究所 1994 「遼寧阜新縣查海遺址 1987~1990 三次發掘」『文物』11。

(ハンブル)

- 브로단스키 데. 엘. 1996 (鄭 燾培 訳) 『沿海州의 考古学』學研文化社。  
(D.Brodianskiï 1996 鄭 燾培 訳 『沿海州の考古学』學研文化社。)  
金 相冕 1990 「清道沙村里遺蹟發掘調查報告」『考古学誌』2, 韓國考古美術研究所。  
国立慶州博物館 1991 『蔚珍厚浦里遺蹟』。  
釜山直轄市立博物館 1993 『凡方貝塚 I 』。

(露文)

- Андреева Ж.В.編 1991 『НЕОЛЕТ ЮГА ДАЛЬНЕГО ВОСТОКА : Древнее поселение в пещере Чертовы Ворота』 Институт истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока АКАДЕМИЯ НАУК СССР。  
(Zh.アンドレーバ, N.コノネンコほか 1991 『極東南部の新石器時代：チョルダヴィ・ヴァロータ洞穴の古代遺跡』ソヴィエト科学アカデミー歴史学考古学及び民俗誌研究所極東支部。)

図の出典

- 図 1 (谷 2000), 図 2 (土肥 1997), 図 3 (樋口 1932a), 図 4 (藤田 1983), 図 5 (浙江省文物管理委ほか 1978), 図 6 (長野県埋蔵文化財センター1998『松原遺跡縄文時代編』上信越自動車道埋蔵文化財發掘調査報告書 4), 図 7 (東京都八丈町教育委員会 1987『倉輪遺跡』), 図 8-1 (川崎 1996), 図 8-2 (川崎保 2004「編年玦状耳飾」『季刊考古学』89号, 雄山閣), 図 9 (土肥 1997), 図 10 (宇都宮市教育委員会 1988『聖山公園遺跡V—根古谷台遺跡發掘調査概要—』宇都宮市埋蔵文化財調査報告 24), 図 11 (方 1991), 図 12 (朝格巴 図 1996), 図 13 (鄧 2007), 図 14-1,2 (川崎 2002), 図 15 (鄧聰 2004), 図 16-1~5 (鄧 2007), 図 17 (末永雅雄編 1933『本山考古室図録』岡書院), 図 18-1,2 (神奈川県教育委員会 1979『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 15), 図 19-1,2 (図 10 出典と同じ。), 図 20-1 (川崎 2003b), 図 20-2 (川崎 2007c)。